

教室から飛び出す子どもたち

— 佐藤学の講義から

内山雄平

はじめに

先日、佐藤学（注1）の「学びの共同体」を学んで授業づくりに挑んでいる「新潟学びの会」冬の研修会に参加した。今号の特集と密接に関わるからである。

研修会のテーマは「協同的な学びをとおして、質の高い学びに挑戦する授業づくり」で、県内小中学校の教師たちが自らの公開授業をビデオに撮り、会場で披露して参加の教員や講師に批評してもらう研修である。まとめは、佐藤学氏が全体を評価し、「学び育ち合う授業づくりと学校づくり」と題して講義を行った。

ここでは、佐藤学の「学びの共同体」の学校づくり・授業づくりの講義を中心に、最近の座談会（本号34頁）

で得た、新潟の子どもたちの様子を念頭に、子どもの学びの問題で何がおきているのか、どのようなことが求められているかを考えてみたい。

佐藤学「学びの共同体」は、
なぜ諸外国に人気なのか

今、佐藤学の「学びの共同体」の学校改革は、台湾、中国、韓国で熱狂的に受けとめられている。彼の講演には、例えば韓国はこの会場でも2000人、台湾では3000人も集まり、中には彼の本4〜5冊をぼろぼろになるまで暗唱する人や中国では3泊4日もかけ講演を聞きに来て、講演後にはこれでやっと希望が見えた、幸福になれるとの感想を耳にするという。

何故、これほどの関心と反響を呼び起こしているのか、一言で言えば、授業の不成立だという。その要因として、台湾では一斉授業が支配的であるため、ほとんどの教室で子どもの学びが成立しない状況が生まれていること、受験学力からの脱皮をほとんどの教師と親と子どもが求めていること、2014年度から実施される12年義務教育制度の実施、高校入試が一部を除いて廃止されることが決定し、その対応が学校と教師に求められている。中でも高校入試の廃止は、これまで受験の圧力に支えられてきた教師たちに授業の根本の見直しが迫られているのである（『総合教育技術』2003年11月号）。

翻って、日本の、新潟の子どものおかれた状況はどうか。先述の座談会にあるように、教室から子どもたちが抜け出し、その対応に追われることが少なくない。とりわけ小学校は学級担任制だから教室内の出来事は否が応でも教師は単独で責任を負わねばならない。特に同僚を温かく支え合う仕組みや雰囲気がない職場では、他の教師や子ども・親に能力不足と見られ、とても辛い立場に立たされる。結局は、多忙さと重なり精神的に追い込まれて休職または退職を余儀なくされる。

新潟県の公立学校教職員の平成24年度休職等は430人でうち精神疾患によるものは183人で42・6%となっている（『教育月報』平成25年8月）。40歳代〜50歳代のベテランや中堅に多い。

なぜ子どもは教室を飛び出すのか

何故、子どもたちが教室を飛び出したり、授業を妨害するのか。その要因について、佐藤学は「授業が分らないからとか自分は嫌われているとかという理由では必ずしもない。本人が排除されていると感じているからだ。教師のあの子さえいなければという思いがその子に伝わる、そして子どもが子どもを排除しているからだ」と語る。ではどうするのか。

「教師にも限界があるから、子どもが教師を支える状況をつくることだ。それには、教師が丸ごと子どもを引き受けることがスタートとなる。その子を教師も子どもも排除しない教室にすることだ。誰にも声をかけ、どの子も独りにしないこと。」

また、荒れる学校は、教師のやることが雑になっている。文字が汚い、机を拭かない、授業をなめている。低学力だから『ドリル』を、ではいけない。子どもは

復習を一番いやがる、いやがることを益々やることになる。もっとケア学習（心を砕いて世話すること）をきちっと丁寧に細やかに対応する必要がある。注意ばかりではダメで1年生の時からきちっと習慣づけることが求められる」

それでは、どうすれば子どもを排除しないで済むか、「今日の教育の最大の危機は学びからの疎外（よそよそしい、実感を伴わない、学んでいる気がしない）にある」とし、学びからの疎外には、次の三つをあげている。

- ① 対象性の喪失：文学を読んでいても文学と出会っていない、数学を学んでも数学と出会っていない。
- ② 他者の喪失：学び合う仲間がない。
- ③ 意味の喪失：自分にとってどんな意味があるかわからない。身体の底からわかった、納得という感覚がない。

こうした学びの疎外を克服するには、「コミュニケーションをつくるしかない、学びの主権者になること、つまり共同体によってしか回復の道はない。それは、学び合う者のつながりを大切に、意味を追求し、その意味のつながりを通して人と人とのつながりを築くことだ」

と主張する。

どこから手をつければよいか

「そこで、教師は具体的に何から着手すればよいか。それは「学びは他者の声を聴くことから出発し、聴き合う関係が対話的コミュニケーションを生み出し、対話の実践が学びを準備する。話し合いではない。話し合いと学び合いは違う。話し合いの活発な授業には学びがない。話し合いは『わかっていること』を発表するから、だから活発になる。しかし、学びは未知の世界への探求、既知世界から未知の世界に向かう旅、活発になりようがない。

だから、学びの大きな特徴はつぶやきた。ぼそぼそという『これ、どういうこと』『なんでそうなるの』『わからない、それ、どういうこと？』というようなことが広がる教室は、学び上手な教室だ。話し合いと学び合いは違う。学び合いに必要なのは話し合いよりも「聴き合い」だ。聴き合う関係こそが学びをつくる。相手との対話によって自分の中で対話ができ、思考力が育つ。友だちと対話ができない子は思考力が育たない。

学びは一人では起こらない。教師、仲間との共同なくして子どもは学べない。そして適切にデザインされた協同的学びは、どんな授業よりも強力で有効である。教師は、自力解決にこだわる。教師は人に頼ることを嫌う。『また人に頼って』と非難し、独りでやるのが良い学びと考えている。しかしそれは間違いだ。『依存からしか自立は生まれません』、『模倣からしか学びは生まれません』と、学び合いは共同で成立することを強調する。

しかし、「現在小・中・高でも「学び合い」による授業改革が展開されているが、その多くは、『協力的学び』であつて学びの共同体の学校改革をすすめている『協同的学び』ではない。協力的学びは、個人でまなぶより集団で学ぶ方が、競争的関係の学びよりも協力的学びの方が、達成度が高いという理論にもとづいており、『協同的学び』はヴィゴツキー（注2）の発達の最近接領域（注3）の理論と「デュイーのコミュニティ理論」に基づいている」として、その違いを明らかにしている。

教科の本質に迫る教えを

「どうすればわかるか」より、「何故つまずいている

か」を追求することが大切だと説く。

以下、長くなるが、そのまま引用する。どう困っているかを教師は聞いていない。その先はどうなるか、交流できると、それが広がっていくのではないか。

小学校算数の小数の教え方で、今の教科書ではみんなつまずく。小学校の場合、3年生は3年生の教材で教えることになっているが、3年生は5年生の中身も教えた方がよい。なぜか、3年生は小数第1位まで、4年生で第2位までと小数かける整数、5年生になって初めて小数と小数のかけ算が出てくる。小数がわかるというのは、10進法の構造と小数点の位置関係がわかるということだ。だから、3年生の時に小数2位と3位を教えた方が良く、それがジャンプ（跳躍）になる。ジャンプを入れないと小数の意味がわからない。上の学年の内容に入っていないかと、下の内容もわからない（子どもの躰きを数学的に考えてみる必要がある）。

できる子は『基礎から発展に進み』、できない子は『発展から基礎におりる』、この方がわかりが早い。成績の低い子は、共有の課題以上にジャンプの課題（注4）において、夢中になって学んでいる。これはどこ

の教室でも見られる。不思議だ。

学びの共同体は、共有の学び（教科書レベル）とジャンプ（教科書以上のレベル）の二つの課題で協同的学びを組織している。両者はそのほとんどが発達の最近接領域の範囲に位置付いている。ジャンプの課題はめんどろだ。それは教科書を教えることしかできず、その範囲しか知らないとやっかひになる。中学校・高校は、発展問題があるからやりやすい。このジャンプ課題は蓄積していかないといけない。

学びの共同体の研究は授業の研究ではない。学びの研究だ。学びの共同体は、「方式」や「処方箋」ではない。「一人残らず子どもの学ぶ権利を保障し、その学びの質を最大限に高め、一人残らず教師の成長を保障するビジョン」であり、哲学であり、活動システムである。

まとめ

佐藤学は学びが成立する要件として、真性の学び（教科の本質に即した学び）を頂点に、底辺をジャンプある学び（創造的・挑戦的学び）と学び合う関係（聴き合う関係）を結ぶ三角形で構成している。この中

私はもともと興味深かったのは真性の学びである。

私の学んだ学校の授業では、数学なら数学の本質を解き明かす授業展開に接してこなかったように思う。専ら解き方の問題に終始していた印象が強い。

子どもたちの何故だろうとふともらす、このことばに教師の気づきと、教師の専門性を絶えず高める研修を期待したい。それには全国学力テストで事実上、学校の授業実践を支配する体制を改めなければならないと同時に、教科書を縛る学習指導要領をもっと柔軟にすべきである。

さらに抜本的な教員定数の増加や長時間過密の勤務の軽減などの諸施策が不可欠である。

（注）

（一）佐藤学：1951年生まれ。東京大学名誉教授、現在学習院大学教授。教育学博士。「行動する学者」として、全国各地の幼稚園、小学校、中学校、高校、養護学校を訪問し、教師と共同して教室と学校を内側から改革する挑戦を行ってきた。教室においては「活動的で協同的で反省的な学び」の実現、校内においては教師同士が育ち合う「同僚性」の構築、学校と地域の連携にお

ては保護者が授業の創造に参加する「学習参加」の実践を推進し、「学びの共同体」という学校未来像を提起して学校改革を推進している（教師たちの挑戦）。

(2) ヴィゴツキー：「心理学におけるモーツァルト」と称されるロシアが生んだ天才学者。心理学者、文筆家、芸術学者など多彩な才能を発揮したが、37才で他界。戦後「新教育」の学習方式によって基礎学力の低下が引き起った日本では、1960年初頭から影響が広がり、1980年代に入ってヴィゴツキーに大きな関心を寄せるようになった（『ヴィゴツキーの入門』・今日のみやくんHP）

(3) 発達の最近接領域：ヴィゴツキーは、子どもが自分ひとりで問題を解こうとする時と比べて、養育者や仲間などによる適切な指導（あるいは環境の整備）がある時のほうが、より難しく、より多くの問題を解くことができる」と述べ、子どもが自力で到達できる水準と、指導のもとで到達できる水準との間の領域を「発達の最近接領域（zone of proximal development、略称ZPD）」と呼び、教育はこの領域に働きかけることによって最も効力を発揮するとした。

ヴィゴツキーによれば、教育は、それが発達の前を進む

時のみ、よい教育であり、そのとき教育は最近接領域にある一連の機能をよびおこし、活動させるといふ。つまり発達の最近接領域とは、子どもの「次に発達すべき能力」のことであり、まだその能力は現実のものとはなっていないが、いつでも成熟すべく準備ができている領域のことである（HP「日本語教師のページ提供：ARC Academy」）

(4) ジャンプの課題：子どもは課題の低いレベルでは絶対伸びないので、低学力の子ほど学習課題を難しく、挑戦するなかで力をつける。

付記

この稿は

○第5回学びの共同体研究会冬期研究会（2013・1）講演、佐藤学「学びの共同体における協同的学びの省察」

報告者・伊藤伸一郎（那珂市第二中学校）

○佐藤学『学校を改革する』岩波ブックレットNo.842
2013・4

○佐藤学『教師たちの挑戦』小学館（2008・1）
などに依った

（うちやまゆうへい・事務局長）